

第4章 相互連結行動と組織化

セッション8 【要約 by 大谷直也】

ある人の行動は他者の行動に依存している。これを相互作用という。二者間で相互作用の連鎖が完結するときこれを二重相互作用といい、これは人間の相互作用を記述する基本単位である。組織構造とは相互連結行動の規則的パターンによって確立される。本章の目的は、相互連結行動というものを様々な方法で明確化し、相互作用の様々な集合がどのように過程に組み立てられ、それらの過程がどのように組織を構成するかについて述べることである。

集団構造の概念

一般的には、まず集団が形成され、その後にルール of 収斂が起こると考えられている。しかし実際には、手段が収斂し、その共通手段をもとにして、集合が形成される。その際、各個人が行為を行う際の目的が一致している必要はない。

手段—収斂の発展

集団の形成は、集団発展の4段階モデルによって説明される。

- ① まず集団は、多様な目的を追求する各個人によって形成される。
- ② 各個人は、多様な目的を達成するために、共通の手段を有する集団構造を形成する。
- ③ この共通の手段として相互連結行動を行っていくうちに、組織全体で共有された共通の目的が支配的になってくる。共通の目的のうち基本的なものとして集合構造(=各個人が欲求を満たすための道具)の維持・保存が挙げられる。こうした共通の目的が支配的になる状態は、規範の明確化や行為の類型化といった現象により確認できる。共通の目的が共通の手段の後に生じることの合理性は、行為の意味づけが事後的に為されるという事実からも確かめられる。
- ④ 共通の目的が支配的になっていくと、次第に各個人は多様な手段をとるようになる。このようなシフトが生じる理由としては、次の三つが挙げられる。
 - (i) 分業が進むに従い他者と共有していないもので各個人が評価されるようになるため、各個人は自分の貢献にのみ関心を払うようになる。
 - (ii) 集合構造という秩序だった空間の中に属しているとその周りの世界の無秩序さが対比効果によってより意識されるため、各個人は(外的な座標軸に頼らず)自分の軸に従い特異的な行動をするようになる。
 - (iii) 集団の中で他者とは違うことを示すために、各個人は独自性を再確立して主張するようになる。

各個人が多様な手段をとり特異的な行動をとり始めると、彼らは多様な目的を再び追求するようになり、再び①～④のサイクルを繰り返すことになる。このサイクルに従い集団は互惠的行動を繰り返しながら集団は存続する。組織のメンバーは、欲望ではなく行動を調整することで組織を存続させている。

部分的包含

人は一つの集団に全ての行動を注ぐのではなく、コミットメントと相互連結はいくつか

の集団に散らばっている(=部分的包含)。ある集団の中で互恵的行動をもたらしてくれるメンバーと結びついて、他の互恵的行動をもたらす人物は他の集団の中に求めるかもしれない(集団のもたらす結果を何らかの基準で判断しその集団へのコミットの有無を決めるとする選択比較水準説の否定)。ゆえにある集団の個人の行動を予測するには、ある互恵的行動への専心の度合だけでなく、その行動が他の集団においてどれほど関連しているかを知る必要がある。また、人間の行動は相互連結されているものもあればされていないものもあるため、組織のメンバーは個別的であると同時に社会化されていると言える。

人は一度集合構造に属すると、それを安定させるために相互連結されている行動以外の行動も組織に結び付けるようになる。こうして個人にとっての組織の生は、集合構造の中で為される全ての行為によって事後的に意味づけられることになる。個人は部分的包含の自覚の有無にかかわらず、彼の才能の一部のみを使い、集団の中で遂行すべき行為を行う。

結論

集合構造とは、相互に構造化され合う行動をベースに構成されている。

相互等値構造

完結的行為とは報酬の消費を伴う仕上げの行為であり、手段的行為とは初めの行動あるいは完結的行動を行うための行為である。相互等値構造とは、自分の完結的行動ができるかどうかは他者の手段的行為に依存し、かつ自分の手段的行為が他者の手段的行為を引き出すときに生じる。相互等値構造は、他者の動機や目標、また全体の構造や相手が誰か知らなくても維持が可能である。相互等値構造の形成条件は以下の三つである。

- (i) 他者が手段的行為を行ってくれる。
- (ii) 自分の手段的行為が他者の手段的行為を引き出すことを知っている。
- (iii) 自分の手段的行為を繰り返し行う(←双方が(ii)の条件を満たしていると予測しやすくする)。

二者のそれぞれの複雑なマップが総合され全体が相互等値構造となると、そのマップは二者の理解を超えるほど複雑になる。これは組織の基本原理である。組織の複雑性は人間の理解を超えているので、組織は統一性を欠いているが漸進的な意思決定パターンを示す。こうして組織は「その場その場を何とか切り抜け」られるのである。そしてその複雑性は、目的の共有が不必要であることによって達成される。よって構造を単純化して理解しやすさばかりを追求すると、組織は往々にしてうまくいかなくなる。

セッション9 【要約 by 金丸達哉】

最小社会状況：純粹組織化

最小社会状況とは、Sidowskiによって開発された実験技法で、集合構造がどのように発展し機能するかについて調べるため使用する。実験では、二人の人が、互いの存在を知らずに別々の部屋に入れられている。各自は二つのボタンが与えられていて、どちらを押すかで他者の結果(報酬 or 罰)を左右する。このような状況のもとで、相互に有利な相互作用が「無意識」かつ「無意図的」かつ「暗黙のうちに」形成されることが示されている。

有利な相互作用が成立する条件は、二者間の相互依存のパターンと反応のタイミングの

関数を見ることで判明することが見出された。

- ① 二者が相互に運命統制と呼ばれる相互依存のパターンにあるとき、二者の反応が同時に行われる方がバラバラに行われる時よりも相互に有利な解に達しやすい。
- ② 二者の一方が運命統制で他方が行動統制という関係のとき、二者の反応が同時でない方が相互に有利な解に達しやすい。

現実世界でも、取引が①②どちらのパターンに当てはまるのかを考えると安定した相互作用を形成することにつながると考えられる。このように互いの存在を知らないふたりが不完全な知識のもとでも相互有利を形成することから、この単純なユニットを組み合わせることによってつくられる複雑な社会構成体を維持するにも、個人個人が完全な知識を持っている必要は全くないということが言える。

二重相互作用の組み立て

安定した組立ブロックとしての二重相互作用

Simon (1962)が考えた二人の架空の時計屋のたとえ話のように、単純な構成部分から大きな組織を作るのに必要な時間は、安定した潜在的中間形態(組立ブロック)がいくつあるか、またそれらがどのように分布しているかに依存している。Simon は「ほとんどの物は他のほとんどのものと弱くしか結びついていない」という空世界仮説を唱えたが、長期だが頻度が少ない相互作用はルース・カプリングのもので、短期で頻繁な相互作用はタイト・カプリングのものである。

二重相互作用とルース・カプリング

二つのシステムの間で共通の変数がわずかであるか、その変数が(システムに作用する)他の変数よりも弱いとき、ルース・カプリングがあるという。普通ならば持続的行動を乱してしまうような変動に直面しても、システムがその行動を維持する。二重相互作用と二重相互作用間のルース・カプリングとから成る安定した組立ブロックの組み合わせは、組織を考える上で魅力的である。

二重相互作用の組み立てルール

組立ルールとは、有力な組織メンバーが過程をつくる時に利用しているレシピである。いかなる過程にも、組立サイクルと相互連結行動サイクルの二つの要素が含まれている。インプットの知覚された多義性の量が多くなれば多くなるほど、過程を組み立てるのに使用されるルール数は多くなる。逆に、インプットが多義的でないほど、多数のルールが適用されることとなる。そうして作られた相互連結サイクルを二つ以上組み合わせたものが「過程」である。

過程の組み立て

次の三つの段階を経て過程は完結し、ループを閉じる。

- ① メンバーがインプットにどれだけの多義性があるか判断する
- ② 活用されるルール数と、インプットへ適用するために選択されるサイクルの数との関係
- ③ インプットに適用されるサイクルの数と、サイクルが適用された後にインプットに残

留する多義性の知覚される量との関係

結論

相互連結行動の集合が一度確立されると、そこに集合構造が生まれる。そしてその安定した組立ブロックから組織は成り立っている。